
神の右席に座るもの

黒糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の右席に座るもの

【Nコード】

N8364V

【作者名】

黒糖

【あらすじ】

これはある男が『とある』の神の右席の力を持ってゼロ魔の世界へ知らない内に転生した話。

(前書き)

つい書いてしまいました。

これはある一人の男が、死んで異世界に転生しただけのよくある話
ただし、前世の記憶と神に近づく力を持ったイレギュラーとして……

「ハア……ハア……！」

あるうっそうと茂る森の中、一人息を切らしながら走る黒髪の10
歳くらいの少女がいた。

「待てやガキー！」

「ちっ、すばしっこい奴め！」

そしてその後ろからは数人の男達が怒声をあげながら少女を追いか
けていた。

（まさか……こんな所で盗賊に会うなんて……）

今日、彼女はこの森で食材となる植物を探しに来たのだが、偶然盗
賊達の隠れ家を見つけてしまい、更に運悪く見張りに見つかった盗
賊達が隠れ家の口封じの為に捕らえようと少女を追っかけているの
だ。

「ハアッ……きゃ!？」

と、焦って逃げていたため少女は転んでしまい盗賊達が追いついてしまった。もったもったも、子供と大人の男達ではいずれ追いつかれていただろうが。

「ちっ、やっと追いついたぜ」

「どうしやすか兄貴?捕らえて売り飛ばしますか?コイツなかなかの上玉ですぜ」

男達に囲まれ少女は絶望と恐怖で泣きそうになっていた。
無理もない、この状況で子供の彼女が逃げ切れる可能性などほぼ無い
うえ、彼女は盗賊がどうゆうものか知っていたからだ。

「た……助けて……ください……」

「そうはいかないんだよお嬢ちゃん。俺達の家を知られたからには
帰す訳にはいかないんだよ、だから……諦めな」

少女の頼みを一蹴すると男は少女に手を伸ばしながら近づく。

「あ……ああ……」

もうだめだ、と少女が思った時、

「『大気』を上位に、『人』を下位に」

「なに……ぐっ!？」

男達の後ろからそんな言葉が聞こえ、それと同時に少女に近づく男の動きが止まった。

「だっ誰だ!?!」

その声が聞こえた方を少女も男達も向くと、

「やだねえ……あんたらロリコン?」

そこには紫の跳ねた短髪の少年が、幼い顔に似合わない仏頂面をして立っていた。

「なっ、なんだてめえ……え……?」

そして少年を向いた男達はその瞬間、次々にバタバタと地面に倒れていき気絶した。

「なあっ!?!?て、てめえ!メイジか!?!」

あまりに不可解な出来事に、動けない男は少年を魔法を使うメイジだと予想し、顔に恐怖を浮かべる。それに対して少年は男の前に近づくと

ドグウツ!

目にも止まらぬ速度で男の顔を殴り、近くの木々を薙ぎ払いながら身体を吹っ飛ばした。

「うん?ちょっと強すぎたか……あ、無事みたいだな」

その光景にしばらくポカーンとしていた少女だったが、自分を助けてくれたと理解すると慌てて自分と同じくらいの少年に返事をする。

「う、うん！ 助けてくれてありがとう！ あ、私はシエスタ、あなたは？」

「……オリアだ」

「オリア……。ねえ！ アナタってメイジ？」

「……いや」

その質問に、オリアという少年は一瞬考える素振りをしたあと答えた。

「ただの平民だ。ちょっと天使に近いだけの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364v/>

神の右席に座るもの

2011年8月16日07時32分発行